

## 宗教的コンヴァージョン研究の比較理論的考察

松本 泰典

### 【抄録】

宗教的コンヴァージョンに関する研究は、1960年代以降、社会学において新宗教への入信研究として新たな潮流を生み出した。本論文は入信に関する諸理論を比較検討し、再評価と代替的視点を模索する。特に、入信過程を入信者の内面的変化として一元的に定義する既存の諸理論に対し、本論文は「入会」と「入信」が同一ではない点を留意しつつも、「入会までの経緯」と入会後の「信者としての成熟過程」の間で見られる入信経験のダイナミックな変動に視点を向け、入信理論の分析的有効性を高める試みを行う。

### 【キーワード】

宗教的コンヴァージョン、新宗教、入信、回心、社会構築主義、合理的選択、ロフランド＝スターク・モデル、入信モチーフ

### はじめに

なぜ人は新宗教に入信するのか。この問題を考えるために、様々な社会科学的な研究が試みられてきた。“conversion”が日本語では「入信」「回心」「改宗」を意味し、その多義性ゆえに religious conversion に関する研究も多様である。回心研究および入信研究の歴史的考察は、川上（2007）と井上・島菌（1985）に詳しい。これらによれば、回心研究は、宗教的達人やカリスマ的存在がいかなる宗教的体験を通じて宗教家に転身するに至ったかを研究するものが中心だった。回心研究は心理学と宗教学を中心に研究されていたが、1960年代より新宗教運動（New Religious Movements: NRMs）の活発化に伴い、社会学および心理学での入信研究が盛んになった。入信の社会学の学術的進展については、川上（2007）、伊藤（1997）に詳述されているように、この頃から社会学的理论について数多くの野心的試みがなされ、1970年代後半から1980年代前半にかけて学術的ピークを迎えている（川上 2007）。その後、入信研究は文化人類学の分野において、改宗に関する研究として新たな展開を見せている。かくして、宗教的コンヴァージョンに関する研究は、心理学・宗教学・社会学・文化人類学の各分野での理論的展開の末、研究者の数ほど異なる見解を生み出してきた。

本論文は主要な社会学の入信理論について、比較論的再考を試みるものである。社会学における入信研究の研究範囲として、伊藤（1997）の立場「1)神秘体験ではなく、ある宗教集団への帰属過程を扱い、2)その対象を宗教的達人でなく一般信者におき、さらに、3)伝統的宗教の枠内でなく、新宗教への入信過程を究明しようとする点で、心理学の回心研究と異なる」を参考とする。

## 1. ロフランドとスタークの World-Saver Model

1965年にロフランドとスタークが共同研究で発表した入信モデル(“World-Saver Model”)は、入信研究の重要なターニングポイントとなった(Lofland & Stark, 1965)。このモデルについては、伊藤(1997)と稲場(Inaba 2004)に詳しく論じられているため詳述は避けるが、このモデルの出現から社会学の入信研究は本格化したと言える。

ロフランドとスタークは、統一教会の布教活動と入信過程の観察からモデル構築を試みた。ロフランド＝スターク・モデルは、①持続的緊張、②宗教的パースペクティブ、③宗教的な探究心、④人生の転機で宗教と出会う、⑤信者との絆の強まり、⑥一般社会との絆の弱まり、⑦宗教との集中的な相互接触の7つの過程から構成されている<sup>(1)</sup>。前半①～③を個人の内面的要因、後半④～⑦を相互作用的な状況的要因として、入信プロセスの理論的説明が試みられたが、数々の後続研究は、モデル検証を通じて、モデルの部分的な適用性は認めるものの全面的な有効性については懐疑的な結論が有力だった。伊藤(1997)は、このモデルを再評価する試みの中で、7つの条件は入信の必要条件ではなく、入信研究の重要要件であると結論付けている。

統一教会の入信過程を理解するために構築されたモデルを、一般理論として他のすべての宗教の入信過程に適用できるかについては、今となっては肯定的な議論が提示されることはない。ロフランド自身、後にこのモデルを放棄するにあたり、「今、一歩下がって、このモデルを入信プロセスの質的な理論化の一例として考えたい」と言っている(Lofland 1977)。即ち、彼自身もこのモデルが普遍的に量的な検証に堪えうるものでないことを認めている。

## 2. 受動的パラダイムと能動的パラダイム

ロフランドとスタークの画期的な理論化の試みの後、入信研究は重大なパラダイムシフトを迎える。それは受動的パラダイム(passivist paradigm)中心の社会科学において、能動的パラダイム(activist paradigm)の出現と共に到来した(Strauss 1979)。能動的パラダイムとは、ゲーム理論以降、社会科学全般に広がりを見せた合理的選択理論の流れであるが、社会規範を内面化する受動的な人間像を描くデュルケム社会学以降の伝統を踏襲する受動的パラダイムに対するアンチテーゼであった。入信研究において、受動的パラダイムの視点は、入信過程の社会規範的要因や社会環境的要因に関心があり、能動的パラダイムの視点では、求道家(seeker)に見られるような合理選択的な入信者の自覚的なニーズや目的に関心が向けられる(Strass 1979, Gartrell & Shannon 1985)。ロフランドは、1977年の論文で、受動的主体を念頭に置いたロフランド＝スターク・モデルの限界を認め、能動的相互作用的な立場への「改宗」を表明している(Lofland 1977)。能動的パラダイムの出現以降、入信研究は能動的／受動的の二極を中軸に多様な理論展開に向かう。

受動的パラダイムと能動的パラダイムの関係は、客観的アプローチと主観的アプローチの関係に対応している。

受動的／客観的アプローチは入信過程の客観的要因に着目し、いかなる社会的状況や社会規範が個人を入信させたかを解明しようとする。例えば、信田(2006)は、マレーシアのオラン・アスリの住民にキリスト教改宗者が増加している現象について、政府によるイスラーム化政策への反発を改宗の社会的要因として分析している。

能動的／主観的アプローチは入信動機や入信過程を入信者の主観的視点と説明に主眼を置いて研究する立場であり、入信者がどのような動機、欲求、目的を持ち、いかなる合理的選択に基づいて入信に至るかを研究する。方法論的には入信者へのインタビュー等を通じて、その回顧的詳述に基づいて入信動機を分析する。ガートレルとシャノン(1985)は入信研究の対象を、入信しない場合より入信した場合に期待される「報酬」に関する入信者の主観的認識であるとした。彼らは、入信に伴い期待される「報酬」には、肯定的な事態もあれば否定的な事態も想定されうることから、「報酬」より「結果」と表現するほうを好む。入信によって期待される肯定的な結果には、賛同や尊敬、愛情、世界認識等の知的欲求の満足、自分の居場所等が考えられるのに対し、否定的な結果には制裁や迫害、孤立等がある。否定的な結果への期待を考慮することで、入信しない場合の制裁が入信を動機付ける場合や、脱会への報復が脱会を思いとどまらせる場合、あるいは入信に伴う非信者からの制裁や迫害が入信を思いとどまらせる場合等、多様な合理的選択の働きに目を向けることが可能になる。

### 3. 社会構築主義以降の入信理論のパラダイムの変遷

ベックフォード(1978)は、社会構築主義的視点から、入信者が自らの入信過程を回顧的に語る際に、教団もしくは教義の言説体系に基づいて再構築している点を指摘している。彼にとって入信研究は、再構築の金型を研究することだった。

スノウとマキャレク(1984)も、多くの研究者が入信者の説明を事実データとして信頼していることを指摘した上で、それを入信の因果関係の説明の根拠とすることは、経験主義的かつ理論的に問題があると警告している。彼等は、入信者の体験談は入信の要因を説明するためではなく、入信過程における調節機能として着目すべきであると述べている。

これに呼応して、島菌・井上(1985)は、回心研究の再評価の試みの中で、回心物語や体験発表の虚構性を意識しながら、それが信者の信仰の確認や強化の機能を果たしていることを指摘している。

このように、社会構築主義的アプローチにおいては、入信者の回顧的説明は入信過程の事実確認としてではなく、ストラウス(1979)が言うように「人間がいかに社会的・現象学的現実を構築・再構築するかを研究するため」の材料と位置付けられることとなった。

これらの主張に対して、ロフランドとスコヴノト（1981）は、社会的現実を3つの経験レベルに分けて考察することを提案している。第1レベルを入信者の「生の現実」（実際に起きたこと）、第2レベルを入信者の回顧的説明、そして第3レベルを研究者による分析とした。彼らは「入信経験は入信が何を意味するかによって部分的に構築されるものである」（Lofland & Skonovd 1981）と主張する。彼らは、入信者による入信理由の説明は、必ずしもベックフォードが言うような教団の論理によって構築されるものではなく、入信経験の特徴が説明内容を部分的に方向付けると考えた。このことを示すために、彼らは入信経験を6つのモチーフに類型化し、類型が「生の現実」を部分的であれ描き出し、入信過程の分析において入信者の回顧的説明の虚構性を迂回する方法論を模索した。

“motif”は通常、「動機」と翻訳されるが、ロフランド等は入信経験を決定付ける主要な特徴を「モチーフ」として表現している。彼らは入信モチーフを以下の6種類に類型化した。①知的入信—知的探究的かつ自発的な入信、②神秘的入信—神秘体験による入信、③実験的入信—好奇心的な動機からのお試し的入信、④感情的入信—宗教団体の信者との密接な絆や情による感情的動機に基づく入信、⑤リバイバリスト的入信—福音主義系の教会に見られる熱狂的な説法と音楽による感化に基づく入信、⑥強制的入信—洗脳等による強制的な入信。稲場（2004）は、Jesus Army と FWBO（Friends of the Western Buddhist Order）を対象に入信モチーフ理論の検証を行い、⑥の強制的入信以外の全ての類型が適合することを確認した。

さらに、これら6種類の入信モチーフの背景として、入信者の「生の現実」を(1)社会的圧力、(2)入信の所要時間、(3)情動レベル、(4)情動内容、(5)行事参加過程（教義を信じてから儀式や行事に参加したのか、儀式や行事に参加してから教義を信じたのか）の5つの観点に分解し把握することを試みた。5つの観点のうち(3)(4)は内面的現実を示し、(1)(2)(5)は状況的現実を示している。これら「現実」の観察は、入信者による解釈的・分析的見地は何ら含まれていない。この理論の有効性はともかくとして、回心物語の虚構性への指摘に対する反論として、「生の現実」の抽出を試みたロフランドとスコヴノトのモチーフ理論の学術的意義は大きいと言える。

この試みに対して、たとえ「生の現実」の観察によって回心物語の虚構性を迂回できたとしても、リチャードソン（1985）は、第3の現実、即ち研究者の学術的分析もまた、その時々の理論的流行の影響を受け、時代とともに変遷していることを指摘している。彼は「学術的説明にも疑問の余地はある。入信者の説明を理解し、またそれが現実に起きたことをどのように関係付けているかを把握する過程で、研究者の個人的なバイアスが介入している」と述べている（Richardson 1985）。

時を同じくして、マーカスとクリフォード（1986）は文化人類学のポストモダンの批判として、民族誌は研究者の理論的バイアスを通じた解釈であり、真実を描き出すものではないと指摘している。

そうであるならば、エホバの証人の入信研究において、回心物語の虚構性を発

見たベックフォードの研究もまた、彼の社会構築主義的なバイアスによって構築された「現実」であるというパラドックスに行き着く。回心物語がどの程度、教団の金型によって形成されているかの判断も研究者に委ねられているのである。

入信をどのように定義するかにもよるが、入信が自己認識や価値観の変容を伴う全面的な内的変化であるならば、入信過程を経て、入信者のものの見方や考え方、因果律の認識が変わっても不思議ではない。入信者が自らの人生の意味を再解釈する場合や入信を運命論的に説明する場合、その言説は新たに受容された価値観と言説体系に基づいている可能性は高い。その際に、回心物語が入信者の認識論的な境界に輪郭付けられた再構築なのか、教団の恣意的な操作による再構築なのかはケース・バイ・ケースであると考えられる。ベックフォード(1978)は、エホバの証人に「公認バージョン」の回心物語が存在していたことを示しているが、彼の主張通り「公認バージョン」が実際に存在し、教団がそれを推奨している事実があったとしても、所与の回心物語がそのイデオロギー的クローンであるか否かは、最終的には研究者の解釈による。

では、研究者の解釈の虚構性を指摘したリチャードソンはいかなる代替案を提案しているのだろうか。キルボーンとリチャードソン(1988)は、入信要因を①能動的要因、②受動的要因、③内面的要因、④相互作用的要因に分類し、<表1><sup>(2)</sup>に見られるように、その組み合わせから4種類の入信形態を類型化した。この4類型に基づいてロフランドとスコノヴトの6種類の入信モチーフを再分類した。能動的＝内面的象限には「知的入信」が分類されており、能動的＝相互作用の象限には「実験的入信」や宗教遍歴者の入信が分類されている。

一方、受動的＝内面的象限には、「神秘的入信」と「感情的入信」が分類されている。表1に見られる「信条の変化」とは、教義や教団への疑念や不信を意味する。「精神的病理的要因」とは、罪悪感や自己処罰、コンプレックス等の内面的葛藤を意味している。さらに、受動的＝相互作用の象限には、「リバイバリスト入信」が分類されている。

<表1>

		能動的	受動的
内面的	相互	知的入信 自発的	神秘的入信 信条の変化 感情的入信 精神病理学的
	関係的	実験的入信 社会的漂流	リバイバリスト 社会化 剥奪 強制

この分類に対応して、キルボーンとリチャードソンは、入信タイプ別に入信理論を4種類に分類した(<表2>参照)。まず、能動的＝内面的入信に対応する理論を「人間性理論」とした。これは知的入信や求道者の入信に特徴付けられる自己実現型の入信動機を想定したものである。合理的選択理論はこのカテゴリーに含まれる。ここでは、主に入信者の主観的経験に関する現象学的アプローチが採用される。能動的＝相互作用の入信には相互作用理論が対応する。入信の社会的コンテクストに主眼を置き、入信者が演じる役割や儀礼の働き、規範的圧力、

組織的ヒエラルキー等の社会化過程が主な関心事となる。

受動的＝内面的入信には、心理学的決定論が対応する。即ち、神秘体験を要因とする信仰強化やスピリチュアルな欲求、または罪悪感やコンプレックスの克服への渴望等の、内面的な衝動に基づく入信を研究対象とする理論が該当する。〈

表1〉で「感情的入信」が受動的＝内面的要因に分類されているが、ベインブリッジ(1992)は、情や愛着による入信を社会的影響によると主張しており、愛着を内的動因と見るか社会的相互作用による社会化過程の結果と見るかは意見が分かれる。

〈表2〉

	能動的	受動的
内面的	人間性理論	心理学的決定論
相互作用的	相互作用理論	社会環境的決定論

最後に、受動的＝相互作用の入信には「社会環境的決定論」が分類される。これは、社会化過程を通して組織的規範が内面化され、受動的に入信過程が成立するケースを研究対象とするタイプの理論である。例えば、生まれ育った熱心な信者家庭で、幼少時から教団の信条を教え込まれて育ったケースや、リバイバリスト的入信に見られるイベント的な高揚感によって強化された相互作用を通じて受動的に信者としての成熟過程が進行するケース等が該当する。そして、その極端なケースが洗脳である。また、剥奪理論も社会環境的決定論のカテゴリーに分類されている。

さて、入信を一つの一般理論で説明する代わりに、タイプ別に異なるアプローチを適用しようとするキルボーンとリチャードソンの試みには、大きな学術的な意義があると思われる。上記の議論でリチャードソンが発した研究者の理論的バイアスに関するパラドックス的な問題の解決を、異なる理論の適応性をタイプ別に先鋭化し、分析的有効性を高める選択に委ねた点が興味深い。彼はクーンの言葉を借りて、「科学は政治的過程である」「科学者はある意味でロビー活動と認知獲得に向けての戦いを続ける政治家のようなものである」と述べ、この問題に関する自らの立場を表明している(1985)。ゴドリエ(2007)は、マーカスやクリフォード等の人類学批判への回答として、次のように述べている。「社会科学の言説と成果を脱構築することには賛成だが、その科学的性格を全否定することには反対だ。方法と限界についての意識的な探究によって生み出される、合理的な知識の核を肯定することには賛成だ。人類学と他の社会科学を脱構築して、以前より高度の厳格性と分析的有効性をもつものとして再構築することにも賛成だ。」(Godelier 2007) (3)

#### 4. 社会構築主義 VS 合理的選択理論

ポストモダン批判に対し、社会科学は客観的普遍性と一般理論化構築への誘惑を断ち、局地的な科学的厳格性と分析的有効性を選択することによって新たな生き筋を見出したように思える。しかしながら、社会構築主義が入信者の主観認識

に関して提起した問題については未解決のままである。社会構築主義は2つのテーマを投げかけている。第一は、回心物語が入信者の回顧的フィクションであるという論点であり、第二は、入信者の回心物語がイデオロギーによる加工物であるという論点である。前者は認識論に関わる問題であり、後者は社会学理論に関わる議論である。

第一の論点に関して、社会構築主義的アプローチにとっては、入信者が入信動機をどのように語るかが重要なのであり、入信過程の「真実」を突き止めることには興味がない。いや、むしろそのような「真実」を認めない。回心物語が全くのフィクションであり、信頼に値しないという主張を受け入れるならば、研究者は社会構築主義の道を選択するか、あるいは島薮・井上(1985)が提案するように、回心物語の入信経験分析のための一次資料としての地位を捨て、社会化のドラマ的ツールとして再評価する道を選択する他ない。上記で見たロフランドとスコノヴトのモチーフ理論やキルボーンとリチャードソンのタイプ別理論適用では、心理学的手法や状況観察によって入信者が語らない入信経験を描き出そうとしているが、別の言い方をすれば、これらはベックフォードの批判を受けて、入信者による自己報告的説明への依拠を最小限に限定する試みであると言える。

インタビューの度に入信理由の説明が変わる現実を目の当たりにすれば、入信者の説明に対する信頼度は低下せざるを得ない。また、フィールド調査に従事した者なら誰でも経験があるように、インフォーマントは常に自分の考えを正直に答えるとは限らず、本音と建て前の齟齬もあちこちに散見される。個人的怨嗟や嫉妬、思い込みから事実認識が極端に偏る場合もある。もちろん、剥奪状況に起因する個人的な感情や偏見が入信への経緯に影響を与える場合には、偏り自体が重要な意味を持つ<sup>(4)</sup>。問題は、入信者が内面の葛藤や感情を理性的な「建前」の見解を使って隠蔽する場合や自分の入信の決断を不可避ものとして正当化するために関わりのある他者を「加害者」や「悪者」として脚色的に描写する場合等、入信の背景的事実関係の理解を困難にさせるケースが少なくないことである。したがって、それらを額面通りに捉えてよいかと言えば、スノウとマキャレクが指摘にしたように、そこには経験主義的かつ理論的な問題が生じる。これに関して、伊藤(1997)は一つの入信事例に対し、多面的なインタビューの実施を提案している。入信者と関わりのある当事者の360°観察は、一定の客観性と妥当性を可能にすると推察される。入信者の言説を入信理由の分析の手がかりとするのであれば、対象者の主観的認識の流動性を念頭に置きつつ、分析的有効性を高める努力を積み上げる必要がある。

第二の論点について、入信者の回心物語がイデオロギーによる加工物であるならば、人間性理論や合理的選択理論に見られる個人主義的な入信動機も、全てイデオロギーの複写物に還元されてしまい、入信者の主体的なニーズや入信目的は存在しないことになる。問題は、知的入信や求道者的入信に見られる合理的選択的な入信動機(ニーズ)が、本当に新たに受容されたディスコースの世界に基づいて語られているのかどうかである。バーカー(1986)は統一教会の信者とのインタビュー調査を通じて、多くの信者が入信前に何かを求めていたが、それが何

かわからなかったという事実を報告している。このような場合、自分が求めていたものの「正解」を、教団の言説体系から見つけ出すことは少なくない。例えば、入信者が漠然と人生の意味や霊的神秘等に関する探究心を持っていたとして、教団と出会い教義を学ぶ中で、教義で説かれる「“真理”を知ることこそが自分が求めていたものだった」と、入信目的を回顧的に再構築することはあり得ることである。あるいは、入信者が入信前に持っていた明確な問題意識が、入信過程で変容した観点に基づいて別の説明に書き換えられることもある。例えば、好奇心や剥奪状態からの解放等と本来の目的として入信した入信者が、事後的に運命論的な言説に基づいて、教義が定義する「使命」を果たすことを入信の目的として上書きすることも想定できる。これらのケースは、入信者が明確な知的関心を持ち、自発的な探究心から、入会前に十分な時間をかけて教義を自主的に学習し、「使命」に対する興味の高まりから入会を決意して信者になるようなケースとは、明らかな違いがある。

渡辺（2005）は、オウム真理教元幹部の入信と脱会の事例研究で、対象者 A の入信の経緯を詳述している。A は宗教遍歴を経てオウムと出会う。麻原がヒヒイロカネについて雑誌に投稿した記事に関心を持ち、A が教団に連絡をとったことが出会いとなり、麻原に会って強い感銘を受け入信した。A は当時の自分の欲求を「先生によりなりたいかった」「本当のことを知ることができるようになるため……」と表現している。ここでは、オウムに出会う前から A が神秘的な事象に対する知的欲求を持っており、宗教的な「真理」を体得することを入信や修行に没入する動機としていたことが見てとれる。その後 A は神秘体験を経て、確信を強め、犯罪を救済として正当化するカルト的イデオロギーを内面化させていく。

興味深いのは、回心物語や体験談が通常、教団内部においてテストimoni（信仰体験の証言、証し）として相互作用的社会化のプロセスを担うのに対し、この事例では、A が脱会后および逮捕後に、信者ではなくなった立場で回心物語を語っていることである。渡辺は A の回心物語が、入信、脱会、逮捕後の意見陳述を経て、段階的に変化した様子を描いている。ここで注目すべきは入信経緯の物語とその後に変遷する物語に特徴的な違いがあることである。入信経緯に関して、渡辺は A を「精神世界を放浪する自発的な探求者」と位置付けている。A は知的入信や求道者的入信に見られる合理的選択者として入信に向かっている。一方、脱会以降の回心物語に関して、渡辺は A が先に脱会した友人の「物語」を受け入れ脱会したことや、検察の「物語」を受け入れて意見陳述書を書いたこと、さらには弁護士団との対話の中で、意見陳述書がより反省的なものになり、検察の物語と矛盾する告白を含む陳述に変化していった点を指摘している。即ち、脱会以降の回心物語は、イデオロギー的な加工物としての特徴を持っていると言える。

この事例は、回心物語には合理的選択的な局面と社会構築理論的な局面があることを示している。つまり、合理的選択的な入信動機は虚構的再構築としての回心物語とは異なるものであり、入信者による証言が必ずしもイデオロギーの加工物として再構築されたものではないことを意味している。回心物語の変化やそのドラマ的ツール性に着目する上で、社会構築主義的アプローチは有効であるが、

合理的選択的な入信の説明に対しての適用には方法論的な限界がある。入信者の証言を虚構であると決め付けるのではなく、部分的であれ事実証言としての有効性もあることは認めるべきである。

## 5. 入信の定義と入信研究の視野

スノウとマキャレク (1984) は、多様な入信研究において、conversion が何を意味するのか、どの時点から conversion なのか、どのような状態で conversion と言えるのかについて明確なコンセンサスがないことを指摘している。conversion は、日本語では「回心」「入信」「改宗」等、異なる表現で翻訳されているので、conversion を定義することと、「入信」を定義することには若干の違いが生じる。日本語で「入信」という場合、内面的変化よりも教団への帰属の意味合いのほうが強いのかもしれない。もちろん、入会と信者化は同じではない。義理で入会する場合や、生まれながらに教団の会員である場合、あるいは断り切れずに不本意ながら入会する場合等、本人の自発的な関与が見られない場合は、会員として登録されていても内実は異なる。スノウとマキャレク (1984) は、conversion を「ディスコースの世界の変化」<sup>(5)</sup>と定義しているが、入信過程で起きる内面的変化は、意味体系、価値体系、言説体系に及ぶ根本的な変化である。入会とディスコースの世界の変化は、明確に区別すべきものであり、スノウ等は両者を同一視する誤りを指摘している。

実際、どの教団でも登録されている会員のうち、熱心に礼拝に通い、教団を経済的に支え、布教活動に積極的に関与しているのは一部である。割合は教団により格差はあるが、会員の 100%がこのような確立した信者であることは希である。入会したが活動に参加しない会員や脱会手続きはしていないだけで事実上離れている会員も一定の割合で存在する。これら全てを「信者」と呼べるかは甚だ疑問ではあるが、その一方で「信者」と「非信者」の境界線は依然として不明瞭である。conversion の定義を「ディスコースの世界の変化」と考えるならば、真に入信したと言えるのは、内実の伴う一部の熱心な信者のみであり、入信研究の対象は彼らに限定されることになる。

「人がなぜ新宗教に入信するのか」を問う時、入会後に熱心な信者に成熟するまでに至らないか、場合によっては脱会してしまう者であっても、彼らは何らかの理由でその教団に惹かれ入会したのであり、それを分析することは「なぜ人々が特定の教団に入信するのか」を知る上で重要な情報を提供する。彼らが「なぜその教団に関心を持ったのか」、「彼らは別の宗教を入信していたのか、いなかったのか」、「伝統宗教の信者だったのか、別の新宗教の信者だったのか」、「他の新宗教から改宗した理由は何か」、「新宗教への偏見はなかったのか」、「入会を決意するに際し、その決定的要因は何だったのか」、「周囲の反対や批判は入会の過程にどのような影響を与えたのか」等、入会に至る過程に様々な内的・外的要因が関与しており、入信研究に関連する重要なテーマである。

入会の経緯に関わる状況的要因には、入信者を取り巻く社会環境に加えて、メ

ディアを積極的活用した PR 活動や出版活動、戦略的な布教活動等の教団側の意図的な働きかけも含まれる。最近ではマーケティングを盛んに行う教団活動も見られる (Einstein 2008, Cooke 2008)。新宗教間で過当競争が展開する都市環境では、もはや新宗教は一括りにすることはできず、「なぜ他の教団ではなく、その教団に入信したのか」問う視点も重要となる。

このように、「なぜ人々が特定の教団に入信するのか」の問いかけは、「人がいかにして、ディスコースの世界が変化する程に信者として成熟するのか」を問うこととは異なる研究課題を含んでいることがわかる。したがって、入信過程を一元的な内面的変化と定義するのではなく、「入会の経緯」と「信者として成熟する過程」を切り離して考察することは、入信研究の分析的有効性を高める上で極めて重要である。

「入会の経緯」と「信者として成熟する過程」のモチーフが全く異なる類型の特徴を有する場合、二つの過程を区別して分析すべき根拠はより明確である。例えば、求道者的なニーズから合理的選択者として入会した入信者が、教団の戦略的な PR や信者間の規範的圧力に従い、教団の信者教育システムに基づいた成熟過程に受動的に参与するような場合を考えると、入会前後で異なる理論的アプローチの適用が必要になることがわかる。特に入会儀式 (イニシエーション) が持つ通過儀礼的な効果が、入信者の自己認識の変容に重大な影響を与える場合、入信経験が、入会前後で大きく変換する可能性は十分に想定される。また、入会後に熱心な信者へと成熟しない者や脱会していく者についても、それぞれそうなるに至る何らかの内面的および状況的要因があるはずである。したがって、入信過程を分析する際に、「入会の経緯」と「信者として成熟する過程」の間にある入信モチーフの変動に対して十分な注意を払う必要がある。

そこで、以下では試論として、キルボーンとリチャードソンが提案する理論的枠組みに沿って、この問題を議論してみたい。上記で示したように、彼らはロフランドとスコノヴトの入信モチーフ理論を、能動的／受動的と内面的／相互作用的分類項目を用いて、入信経験および入信理論を 4 種類に類型化した。

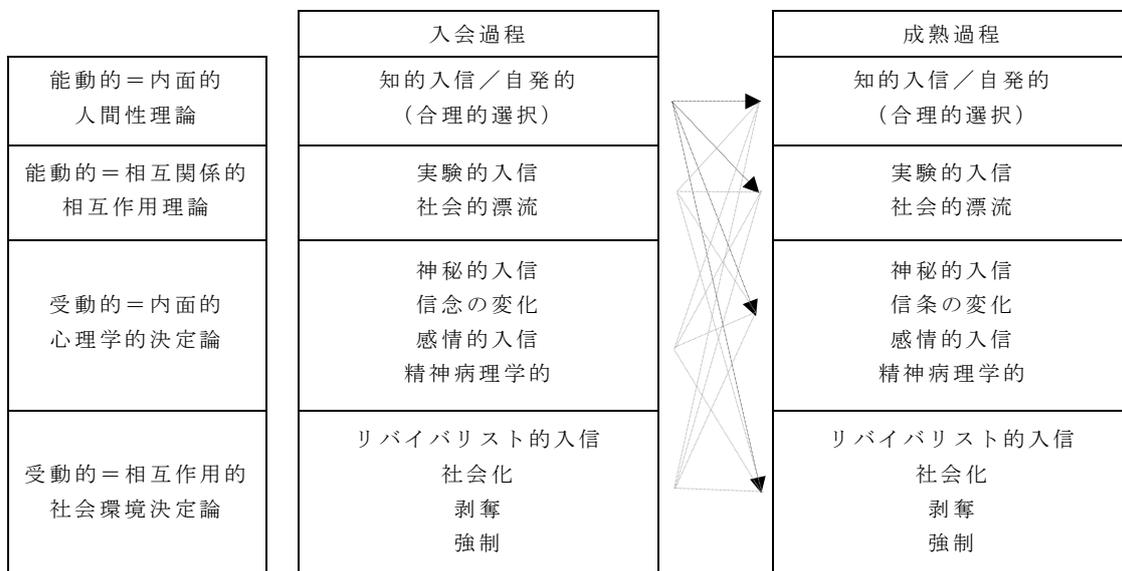
<表 3>は、入会の経緯で経験される類型が成熟過程において別の類型に移行する可能性を示している。知的にもしくは自発的に入会した入信者が、同じく自らの合理的選択によって自発的に研修や布教活動に参加する場合もあれば、神秘体験を経て成熟過程を進める場合や、コンプレックス等の精神病理学的な要因から研修等へ積極的に参加する場合もあり得る。

実験的に入会した入信者が、納得が行くまで実験的に礼拝や研修に参加する場合もある一方で、教団が戦略的に推進する社会化過程に追従して信者として成熟する場合や、入会後に成立した他信者との密接な人間関係に吸収され、愛着や情に基づく感情的要因から社会化過程を経験する場合も考えられる。

さらに、友人関係に基づいて感情的要因によって入会した入信者が、同じく感情的要因に支えられて社会化過程を継続する場合もあれば、別の要因によって成熟過程に進む場合もあり得る。例えば、教義への関心より信者との人間関係への関心のほうが強く、入会時には内面的な信条が生まれ育った宗教的信条の規範的

拘束下にあった入信者が、入会後の信条の変化を経て、成熟過程への自発的参加を動機付けられるケースもありうる。

<表 3>



類型化された入信経験は、特徴的に重複する部分があるため、容易に互換性が成立する。例えば、知的入信は実験的入信や精神的病理的状况、剥奪状況と両立が可能である。スピリチュアルな知的探究心の背景に内面的な葛藤や状況的苦境の克服が動機としてあるかも知れないからである。同様に、社会的漂流や感情的入信、社会化（例えば、生まれ育った家庭環境での社会化）もまた互いに重複し合う部分がある。したがって、入会前後に作用する入信要因は流動的であり、また複数の要因が同時に関与することもありうる。入信をどのように定義するかによって観察の視点は異なるが、入信を一元的に内面的な変化と捉える定義に固執すれば、「入会の経緯」と「信者としての成熟過程」の間に展開するダイナミックなパラダイムの変動は見えてこない。入信過程を二つの段階で区別して観察することは、入信理論の分析的有効性を高める上で効果的な選択である。

## おわりに

本論文では、入信理論の受動的アプローチと能動的アプローチの比較的考察に始まり、社会構築主義的アプローチ以降の理論的展開を俯瞰した。そして、ロフランドとスコノヴトのモチーフ理論とキルボーンとリチャードソンのタイプ別理論適用の視点を手がかりとして、入信過程において「入会の経緯」と「信者としての成熟過程」の間でダイナミックに展開する多様な入信経験について比較理論的観点から議論し、入信理論の分析的有効性を高めるための試論的考察を行った。

本論文で取り上げた諸理論は、主に組織宗教型の新宗教を扱うものであるが、ニューエイジ的なスピリチュアリティ・ムーブメントが世界的な活性化を見せる

現代社会においては、入信研究は形態論的に一層の多様化への対応を迫られる。また、ニューエイジ運動にせよ、組織宗教にせよ、グローバル展開が急速に展開する 21 世紀においては、異文化間および文化相互的 (intercultural, cross-cultural, transcultural) な視点での入信研究へのニーズの高まりが期待される。文化人類学においてすでに異文化間の入信や改宗が議論され始めているが、今後、入信研究において社会学と文化人類学の境界線は加速度的に解消されていくものと思われる。欧米の先進国で発展した特定のニューエイジ運動が、他の地域での受け入れられ方を観察することは、ニューエイジ運動の本質を知る上で重要な示唆を与えるものであろうし、組織宗教型の新宗教が多国籍展開する上で、組織が直面する戦略的課題や異文化的な規範的課題、現地の人々が直面する合理的選択肢や社会的文化的要因を研究することは、従来の入信理論に重要なイノベーションの契機を与えることになると期待される。入信過程の多様化が加速する中、入信研究の分析的有効性を高める理論的探究は、さらに重要性を増して行くだろうと考えられる。

#### 【註】

- (1) 7 過程の日本語訳は伊藤 (1997) を参考にした。
- (2) Kilbourne & Richardson 1988
- (3) 引用は、竹沢尚一郎・桑原知子訳 (2011) 『人類学の再構築—人間社会とはなにか』を参照 (p.27)。
- (4) 渡辺 (2007)、櫻井 (2008) 等が、ライフコース調査の手法で、入信経緯に関する詳細な研究を提供している。
- (5) “a change in one’s universe of discourse”の翻訳は川上 (2007) を参考。

#### 【参考文献】

- Austin, R. (1977) “Empirical Adequacy of Lofland’s Conversion Model.” *Review of Religious Research* 28 (3): 282-7
- Bainbridge, W. S. (1992) “The Sociology of Conversion.” In H. N. Malony and S. Southard (eds.) *Handbook of Religious Conversion*. Birmingham, Alabama: Religious Education Press
- Barro, R. J. Hwang and R. McCleary (2010) “Religious Conversion in 40 Countries.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 49 (1): 15-36
- Beckford, J. (1978) “Accounting for Conversion.” *British Journal of Sociology* 29: 249-62
- Cooke, P. (2008) *Branding Faith*. Ventura, California: Regal
- Einstein, M. (2008) *Brands of Faith*, New York: Routledge
- Gartrell, C. D. and Z. K. Shannon (1985) “Contacts, Cognitions, and Conversion: A Rational Choice Approach.” *Review of Religious Research* 27

- (1): 32-48
- Godelier, M. (2007) *Au Fondement des Sociétés Humaines*. Paris: Albin Michel  
(竹沢尚一郎・桑原知子訳 (2011) 「人類学の再構築—人間社会とはなにか」明石書店)
- Heirich, M. (1977) “Change of Heart: A Test of Some Widely Held Theories About Religious Conversion.” *American Journal of Sociology* 83: 653-80
- Inaba, K. (2004) “Conversion to New Religious Movements: Reassessment of Lofland/Skonovd Conversion Motifs and Lofland/Stark Conversion Process.” *人間科学研究* 11 (2): 33-47
- Kilbourne, B and J. T. Richardson. (1988) “Paradigm Conflict, Types of Conversion, and Conversion Theories.” *Sociological Analysis* 50 (1): 1-21
- Lofland, J. and R. Stark. (1965) “Becoming a World-Saver: A Theory of Conversion to a Deviant Perspective.” *American Sociological Reviews* 30:862-75
- Lofland, J. (1977) “Becoming a World-Saver Revisited.” *American Behavioral Scientist* 20 (6): 805-18
- \_\_\_\_\_. (1985) *Protest: Studies of Collective Behavior and Social Movements*. New Jersey: New Brunswick
- Lofland, J. and N. Skonovd (1981) “Conversion Motifs.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 20 (4): 373-85
- Long, T. E. and J. K. Hadden (1983) “Religious Conversion and the Concept of Socialization: Integrating the Brainwashing and Drift Models.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 22 (1): 1-14
- McGuire, M. B. (2002) *Religion: The Social Context* (5<sup>th</sup> Edition). Belmont, CA: Wadsworth (山中 弘・伊藤雅之・岡本亮輔訳 (2005) 『宗教社会学—宗教と社会のダイナミクス』明石書店)
- McKnight, S. (2002) *Turning to Jesus: The Sociology of Conversion in the Gospels*. Louisville, Kentucky: Westminster John Knox Press
- Richardson, J. T. (1985) “The Active vs Passive Convert: Paradigm Conflict in Conversion/Recruitment Research.” *Journal for the Scientific Study of Religion* 24 (2): 163-79
- Richardson, J. T. (1993) “A Social Psychological Critique of “Brainwashing” Claims about Recruit to New Religions” In J. Hadden and D. Bromley (eds.) *The Handbook of Cults and Sets in America*. CT: JAI Press Inc.
- Snow, D and R. Machalek (1984) “The Sociology of Conversion.” *Annual Review of Sociology* 10: 167-90
- Sremac, S. (2010) “Converting into a New Reality: Social Constructionism, Practical Theology and Conversion.” *Nova Pristnost* 8 (1): 7-27
- Straus, R. (1979) “Religious Conversion as a Personal and Collective Accomplishment.” *Sociological Analysis* 40 (2): 158-65

- 伊藤雅之 (1997) 「入信の社会学—その現状と課題—」 社会学論評 48 号(2・35): 158-176
- \_\_\_\_\_. (2003) 『現代社会とスピリチュアリティ—現代人の宗教意識の社会学的探究—』 溪水社
- 井上順孝・島藺 進 (1985) 「回心論再考」 上田閑昭・柳川啓一編『宗教学のすすめ』 筑摩書房
- 川上恒雄 (2007) 「コンヴァージョンの社会科学研究・再考—概念・方法・文化」 南山宗教文化研究所 17 号: 18-29
- 櫻井義秀 (2004) 「教団発展の戦略と『カルト』問題—日本の統一教会を事例に—」 伊藤雅之・樫尾直樹・弓山達也編『スピリチュアリティの社会学：現代世界の宗教性の探究』 世界思想社
- \_\_\_\_\_. (2008) 「統一教会の研究（一）入信・回心・脱会」 北海道大学文学研究科紀要 126 号: 105-234
- 信田敏宏 (1999) 「改宗と抵抗—マレーシアのオラン・アスリ社会におけるイスラーム化をめぐる—考察—」 東南アジア研究 37 卷 (2): 257-295
- \_\_\_\_\_. (2006) 「『改宗の人類学』序説—マレーシア、オラン・アスリ社会におけるキリスト教化」 国立民族学博物館調査報告 62: 151-168
- 渡辺雅子 (2007) 『現代日本新宗教論』 お茶の水書房
- 渡辺 学 (2005) 「救済と暴力—オウム真理教元幹部の入信と脱会の一事例—」 宗教研究 79 号(2): 375-398

## A Comparative Study on Religious Conversion Theories

Yasunori Sean MATSUMOTO

### *Abstract*

Studies of religious conversion saw a new culmination in the sociological studies on new religious movements after 1960s. This paper compares and reevaluates conversion theories and explore an alternative perspective. In particular, while the existing theories tend to define religious conversion as internal transformation of converts, this paper pays attention to a dynamic relation between the process to become a member and the process in which a convert matures his/her conviction, being well-aware of the difference between becoming a member and conversion, and attempts to heighten the analytical validity of a conversion theory.

### *Keyword*

religious conversion / new religion / social constructionism / rational choice theory / Lofland-Stark model / conversion motif